

船島（巖流島）の決闘・異聞

宮川行志

豊前小倉城下はもとより、門司ヶ関や海峽をはさんだ長門の赤間ヶ関、壇ノ浦、はたまた観音崎に、この数日のあいだに各所に高札が立てられた。船着き場に、辻々に、高札場に。その内容は人々の口から口へ瞬く間に、津波が寄せるように城下に押し寄せ、村々、浦々に流布されていた。噂が噂を呼び、ようやく平穏な暮らしに慣れようとしていた人々は、いやが上にも「決闘——果仕合」の高札に、心が波立ってきた。

高札の内容は、

布令書き 申し聞かす事

一ツ 来る十三日辰之刻、豊前長門及び海道、船島而於て、豊前小倉藩土巖流佐々木小次郎儀、仕合仰



せ被付。

相手方、作州牢人宮本武蔵政名也。

一ツ 当日、府中火氣巖禁。

双方巖眞、助太刀助力乃者共一切、海道渡海之儀罷り成らず、固く禁制。

一ツ 観遊之舟、便船、漁舟等も同様。海道海門往來止。但、辰下刻迄之事。

慶長十七年四月

中世なら、果たし合いをしようが、闘討ちをしようが、法制の網が緩やかで、それほど巖格に行われていなかった。で、咎め立てする世でもなかった。

徳川家康が慶長五年九月の、天下分け目の「関ヶ原の戦」

に覇を占めて以来、世は徐々に天下太平の時代に入った。それから十二年も経っている時である。

天下太平の時代で、武芸での仕官など、西軍に与した人にとつてはままならぬ時代である。若者が、戦場で敵の大將の首級をあげる勲功で取り立てられる時代は終わっていた。関ヶ原の戦いで西軍に与して敗走した落武者たちが西国を目ざして、諸藩へ武芸による仕官を得るための廻国修行に明け暮れる武芸者が、まだまだ幅をきかせていた。

細川忠興、忠利二代にわたる豊前小倉の治世は世評よろしく、ことに武を好む家風から武芸者が京畿や中国からひきもきらなかつた。

関ヶ原の戦いで西軍に身を投じた宮本武蔵は、現在の岡山県北部、美作国竹山城主の新免家の家老をつとめていた宮本無二齋の二男として生まれた。無二齋は美作はおろか近国に鳴り響いた当理流武芸の達人であつた。

幼児より達人無二齋の狂氣的鍛錬で鍛えられた武蔵の刀術は、末恐ろしい武芸者になるという評判であつた。十歳で大人をしのぐ背丈、腕力、脚力、それに負けぬ気は、どんなことでもして相手を倒す執念として近隣に聞こえていた。慶長元年、十三歳の時、廻国修行の武芸者で新当流の使い手、有馬喜兵衛と立ち合い、六尺余の木刀で物陰から全力疾走で駆け寄りざま、これを一撃のもとに倒して以来、

武蔵の名が知れわたつた。武蔵は十三歳ですでに全力疾走の奇襲戦法を会得し、以後、六十余度の果たし合いでこれを縦横に駆使し、相手を圧倒して全てに勝利した。武芸者は常に勝つことを意識し続けねばならない。勝つことに全生命力をこの一点に賭けるのが武芸者である。武芸の負けぬ仕合いの秘法であつた。

武蔵の父、宮本無二齋の当理流は十手剣術ともいわれ、左手に鍔元に鉤のついた短槍（これを当時は十手といった）を構え、突き、ひねりで相手を崩し、右手の刀で斬りつける流儀で、後年、宮本武蔵が編み出した二天一流の独自の二刀流の原点であるといわれている。宮本無二齋は性狷介で、妻を二度娶りながら離別し、主家新免伊賀守宗貫を牢人し、九州豊後、日出藩三万石木下延俊（高台院おねの甥）——細川幽齋（細川忠興の父）の娘婿——に兵法師範として逗留していた。なお日出藩に出仕する前、豊前国中津の城下町で道場を開いた。当時の中津は、豊臣秀吉の軍師として聞こえた黒田如水の息子の長政の治世であつた。黒田家はもとは播磨の出自で隣国美作新免家とは昵懇の間柄ということで、黒田如水の弟の黒田兵庫助利高の口利きで道場を開き順調に流行つた。

その頃武蔵は、関ヶ原の落武者狩りを逃れるため諸国を武芸者として廻国していたが、東軍の懐中に入れば落武者

狩りも逃れられると計算して、反りの合わない父と数年過ごした。関ヶ原の牢人狩りのほとぼりが冷めるのを待って京都へ上った。天下の耳目が集まる京都で武芸者として名を上げるため、天下に名だたる吉岡流小太刀の吉岡憲法の嫡子吉岡清十郎を、洛北の蓮台野で一撃で額を打ち割った。さらに弟伝七郎からの挑戦を受け、五尺の棒の先に仕込んだ鎖分銅の秘密兵器を駆使して返り討ちにした。門弟の怒りは極に達し、清十郎の一子の幼い又七郎を名目人にして武蔵謀殺を図った。世にいう「一乗寺下り松の決闘」である。吉岡一門は待ち伏せ飛び道具まで用意したが、動静を察知した武蔵は、夜明け前に下り松に到着し、松の根方に身を潜め、あとから来た幼い又七郎を抜刀一閃、斬殺した。門弟たちの困みを抜け、疾風のように山中へ逃げ込んだ。この決闘は宮本武蔵の武名を天下に広めたが、いたいけな又七郎を冷酷無比に斬り捨てたことを世人は剣鬼と噂した。もとよりそれは武蔵の望むところであった。冷酷さが剣を支える奥義であることを、武蔵はこの一乗寺下り松の決闘で会得したのである。人が人である心を持てば、その時負けるのである。冷酷無情こそが極意の極意と悟った。その残忍、その卑劣さをいとわぬ心が極意である。二十一歳で得た武蔵の剣の道である。その非情の極意は父無二斎の非情とは違う。実戦から得た、勝つ、どんなことでも勝

つ。勝たなければ即死である。剣法は勝つことでしか存在しない。やさしさなど無縁である。相手を斬らねば我が身が斬られる——誠に明快な理である。人間らしいことはむしろ邪魔でさえある。以来、六十数度の仕合いに武蔵は勝ってきた。

奈良の宝蔵院流槍術の達人、奥蔵院との仕合い。伊賀の鎖鎌創始者の穴戸梅軒との決闘。江戸柳生流(徳川家剣術指南宗家)の高弟大瀬戸隼人との決闘など、名だたる剣法家を倒して剣名はいよいよ高くなっていった。武蔵は、天下無敵の剣法者と称えられるようになり、仕合いを挑む者もなくなってきた。武蔵は、二十九歳の今日まで、あえて挑戦者を探して諸国を廻り、武芸者が召し抱えられたと評判の小倉の城下に草鞋をぬいだ。それには理由があったのである。巖流佐々木小次郎が、小倉藩主の細川忠利公に剣術指南役として仕えている——と聞いたからである。

小次郎と武蔵は浅からぬ因縁が昔から何度かあり、双方共に剣法家として名を知られるようになり、いつかは刃を合わせねばならぬと宿命的な決闘を二人共に予感していた。

小次郎は巖流という一刀流の流派を若くして興し、自らを剣の天才と恃み、師の中条流の達人鐘巻自斎の腕さえ嘲笑し出奔した自信家で、我こそ鎮西一の武芸者と恃み廻国修行していた。武蔵と吉岡一門との決闘では、吉岡一門に

助太刀して武蔵をとり逃がしていた。それ以来、小次郎は武蔵を、卑劣な逃げの武蔵と罵っていた。

小次郎は、色あくまで白く、眉長く、上がり、前髪立ちの少年の如き姿形でありながら、五体は手足どれも大きかった。緋羽織の背中へ革紐で斜めに陳太刀づくりの太太刀で、反りのない竿のように長い拵えを背負っていた。目立つ少年の如き風体に巨きな体は一風変わってはいたが、剣を執っては天才剣で一世を風靡していた。二十歳をこえても元服をせず、二十五、六を過ぎても童子髪を結っており、一概に身なりをもつて小次郎を未成年者と見ることはできない。堂々たる巨漢である。剣法者の条件の第一は、巨しく、敏捷であることとされる。小次郎にはそれが備わり、その上眉目良く美丈夫である。岩国の錦帯橋の柳に舞う燕を一瞬にして斬って落とす早業は、小次郎の編み出した巖流の奥義であり、この秘技で小次郎は果たし合いの相手をつぎつぎと仕留めて、今や鎮西一の名声を博していた。

慶長十七年正月、当時、世に西国一とうたわれた美剣士巖流佐々木小次郎が、豊前小倉藩の細川忠利公に出仕し巖流の剣術師範についた。仕官には家老の一人、米田左近将監の強い推挙があつたとのことである。小倉の城下では、派手な扮装で自信家の、見た目の美丈夫の佐々木小次郎が、七名の供に槍を持たせ馬で登城する姿を見ようと、

紫川の土手には黒山の人だかりができるという噂が城下を駆けめぐっていた。

一方、作州牢人の宮本武蔵は廻国修行中、父宮本無二斎から、「我に、佐々木小次郎からいつか仕合いをしたい、と申し入れが来ている」と報せを受けた。ついでには小倉細川藩家老の長岡佐渡守に「無二斎、老体にて果たし合い覚束ない故、息子武蔵と立ち合いをするようしかるべくお取り計らいをお願い申し上げます」との添書を持参して、宮本武蔵は長岡佐渡守と面会した。すでに二十九歳、鎮西に聞こえた武芸者に成長して、細川忠利公に、二刀流の師範として長岡佐渡守から推輓されたのである。

武芸好みの忠利公は、すでに召し抱えたばかりの佐々木小次郎の巖流と、牢人宮本武蔵の二刀流の仕合いは、いずれの日にか決着をつけねば、家老米田左近将監と長岡佐渡守の確執となり藩の不和を招くこととなることを恐れていた。

武蔵は願ひ叶って、勝山の小倉城内において二刀流の剣術の師範をすることとなった。小次郎、武蔵、いづれ劣らぬ武芸者が忠利公へ剣術師範をすることとなり、この地豊前小倉では、両雄並び立たずの故事が示す通り、いづれ双方の雌雄を決する果たし合いがあるだろう、との専らの世の評判がわき立った。

とくに双方の弟子たちが、わが師こそ西国一、いや日の

本一の剣術家なりと競い、双方の弟子たちが優劣を志利公

に申し立てた。藩士は言うに及ばず、豊前小倉の地ばかりでなく四国、九州、中国、近畿、さらには京、江戸の武芸者が、巖流佐々木小次郎、二刀流宮本武蔵の指南を受けんがため、門前市をなす有様であった。あらゆる階層の人々が双方の鼻貞を名乗り、肩入れする様は、小倉の城下に不穏な空気さえ醸し出していた。城下の世評では「一戦交じわらずんば、おさまらず」と、侃々諤々、口角泡を飛ばして罵り合う始末。また、細川家中の家老職の長岡佐渡守が武蔵を君公に推輓し、同じ次席家老の米田左近将監が巖流小次郎を推挙しており、双方に連なる者同士が事を構えそくな流れとなった。主君忠利は二人の家老を呼び、「いずれも当代随一を誇る秀れた剣術遣い、いずれが当代一となるか決着をつけ、世の不穏の気を鎮めねばならない」と裁断を下した。

——そして、高札が立てられたのである。その時の約定の「双方鼻貞、助太刀助力の者共一切、海道渡海罷り成らず」の一条は、双方弟子は一人も連れて参らぬ、ことであった。

藩命による武蔵・小次郎の仕合の幕は、高札の通り切つて落とされると思いきや……。

慶長十七年四月十七日、辰之下刻（午前九時）の約定の刻

限には何事も起こらなかった。

約定の刻限前の卯之下刻（午前七時）前に、大潮の速潮に乗って一艘の小船が矢の如く船島の北側の入り江に入った。猩々緋の袖無羽織の背に、物干し竿と世に喧伝された長刀を負った美丈夫が待ちきれないように浅瀬に飛び降りるのが検分の役人どもの目に映った。小次郎は逸りに逸っていた。やおら持参の床几を老松の下に据え天を仰いで、刻限をはかっているやに見えた。

——武蔵め、またまた遅参の作戦なりや。遅参は奴の卑劣な作戦、牢人者は外間も恥もない。たゞ是勝つこと以外にはない。それにひきかえ仕官の身は主君へ恥をかかせぬよう卑怯な振舞いなど致さぬよう、万事構えねばならぬ。武蔵の卑劣な手に乗るまいぞ。助力、助太刀など思いも寄らぬこと、潔白な一人勝負に臨むのだ。武蔵とて、主君忠利公の命に背いての助力、助太刀は断じてあるまい。いや、武蔵め、何かを企みおるやもしれぬ……。時刻はすでに約束の刻限、辰之下刻（午前九時）を過ぎ、巳之下刻（午前十一時）に近いではないか。陽は高く昇ってしまった。

猩々織を着た背中の業物が、春の陽光を受けゆらゆらとゆらめく。小次郎は辛抱強く三時（三時間）も待っていた。

武蔵は十六日、門司ヶ関の城代の沼田延元（のぶもと）に父無二齋の伝手（ついで）によって、仕合いのための手配が滞りなく行われ、門司から船島に渡るには強い潮流の海峡を横切らねばならず、非常な労力と時間が必要なので、前日に対岸の長門国赤間ヶ関の廻船問屋に船を仕立てて、船島に向かう手筈をととのえていた。武蔵は下げ潮（引き潮）の最も早い時（時速七ノット）と、太陽が中天にかかる時間帯を重ねて、時間かせいでいた。上げ潮は周防側へ流れ、下げ潮は玄海側へ流れる。下げ潮に舟を乗せれば船島には一氣に寄せられ、小次郎の待つ北側の入江を避け、潮流の影響の少ない南側の入江の浅瀬で海面を背に立てば、決闘を有利に運ぶことができる、武蔵は地の利と天の利を心に描いていた。

かつて一乗寺下り松の吉岡憲法門弟衆の百余人の大勢の敵が強敵か、今日のただ一人の相手が強敵かといえば、烏合（うご）の百人よりただ一人の佐々木小次郎のほうが遙かに惧るべきものであることは勿論である。今日こそは一生のうちの大難であることを武蔵はひしひしと感じていた。知謀の限りを尽くし、策をめぐらし、勝つことに心を碎かねばならないのだ。武蔵は牢人ゆえの自由があり、束縛される何物もなかった。恥も外間も武蔵には無縁のものである。

武蔵は、信頼のおける五人の弟子たちと密かに策を練り上げた。検分役の海門奉行の藩士十人と足軽五十人の眼を

外（そ）らさせるため、目立つ恰好の牢人者を乗せた舟を北側入江に漕ぎ寄せ、検分役の者共をおびき寄せ、そのすきに南側入江の浅瀬に五人の武蔵の弟子たちが上陸し、潜伏する策を立てたのである。

小次郎との決闘の「双方鬣、助太刀助力の者共一切、……罷り成らず」の高札を武蔵は無視し、助力の五人を船島に潜ませた。勝敗の行方にかかわらず弟子たちは、小次郎を倒し息の根を止めることに専心することになった。

一艘の八丁櫓の船が折からの下げ潮に乗って長門彦島から、船島へこぎ渡ってきた。すわ、武蔵と見た小次郎は、駆け寄り呼ばわった。「武蔵、推参！」と叫んだが、

「あいや、しばらく待たれよ。拙者、作州牢人宮本武蔵の使いの者でござる。播磨牢人明石源兵衛と申す者。武蔵、故あって小半刻遅れるとの伝言。検分役目の方にも申し伝える」

待ちに待っていた小次郎も検分役も肩すかしをくってしまった。

その頃、示しあわせた武蔵の門弟五人は首尾よく南側入江から上陸して、雑木林の中に風の如く消えた。

ようやく武蔵は、動いた。巳之下刻。潮も下げ潮となり猛々しくなり、泡と飛沫が渦巻いて玄海の方へ押し寄せて

いく。小舟が渦潮に乗って船島の方へ舳を向けて急いでいる。赤間ケ関の廻船問屋の水夫、仙太郎の櫓に武蔵は身を任せていた。

「仙太郎、約定の刻限はとうに過ぎている。あわてるでない。潮に任せておけば運んでくれる。風も追手だ」

「と、おっしゃられても、辰之刻はとづくに過ぎましたゆえ……」

小舟は時折、真つ白なしぶきをかぶった。仙太郎は今日の果たし合いの道行きの櫓を漕ぐことを名譽なことだと思ひ、心も体もたかぶっていた。漕ぐ肩に一層力が入った。

「だいぶかかろうかのう」

武蔵は額に手をかざして、行く手をじつと見つめている。舟の胴の間にとつかと坐っていた。

「なあに、この風と、この潮の按配だと、そんなに手間はとりません」

「すると、船島へ着くのは」

「巳之刻、いや巳之刻過ぎ(午前十一時過ぎ)になりましようか」

「ふむ、ちょうど程のよい時刻だ」と武蔵は落ち着き払って言った。

その日、船島で今や遅しと待ち受けている小次郎と、舟中の武蔵の仰いでいた空は、どこまでも深い碧さであった。

そして長門の山に一刷毛はいたように旗のように流れているほか、雲の影もなかった。

門司ケ関の建て込んだ町屋が望見され、後ろの八窪山、

砂利山、風師山が描く褶曲した老婆の皺のような山肌も手に取るように見えた。明る過ぎるほど明るい。太陽が眩い。

「仙太郎、昨夜貰った櫓は、これだ」と言つて、武蔵は荒筵の包みを開けた。中には優に六尺は超える木刀が転

がっていた。昨夜ごつごつ木を削る音がしたのは、割れた櫓を木刀に仕立てる音だったのだ。

「みごとな出来映えでござりまする。堅い櫓の櫓は、どんな業物でも歯が立ちますまい。小次郎様の物干竿でもつてしても」

「仙太郎、追従を言うでない」と、武蔵はフッフツと小鼻で笑つて答えた。

「あれか、船島は」

「いえ、あら、母島の彦島でござりまする。船島はもつと先の方で、ここからはまだ見えませぬ。彦島の北東、五、六町ほど離れた、皿を伏せたような平べったい島で」

「見えるな、いくつもの島が……」

「六連、藍島、白島などの島の中でも、船島は小さい島でござりまする。伊崎、彦島の世間でいう音戸の瀬戸で、西は門司ケ関の清滝、風師、大里の浦々でござりまする」

「このあたりの島々、浦々には元暦の昔、九郎判官殿、平知盛卿などの戦の跡だの、その昔そらんじたことを思い出したわ」

仙太郎は一心に櫓を漕ぎながら考えた。今や死地に赴かんとしながら、こんなことを話していいものだろうか。一漕ぎ進むごとに仙太郎は気が昂揚し、胸の動悸は早くなり、ともすると手先が硬直しそうになった。あたかも自分が決闘するかのような気になっていく。今はこうして坐って喋っておられても、帰りはものいわぬ死体に変わり果てるかも分からないのに、のん気に島や歴史の話に興じておられる武蔵様という人のあまりにも淡々とした姿に、仙太郎は感心するより呆れていた。とんだ痴れ者かもしれない。武蔵は舷から、真つ青な海水の流紋と、泡立つ波頭に眼を落とした。水の流れは一時も止まらず、来り流れ、流れて来る。一瞬の生命は、この流紋や泡のようにはかない。いわんや決闘においてをや……である。水は形を持たず方円の物に従い自由無碍である。人を倒す、人に勝つことに囚われている間、一定の形に囚われているうちは、人間の持つ無窮の生命は持ち得ない。眼前の死も生も、この流紋や泡に似ている。心は生死を超越したつもりでも、武蔵の肉体は緊まった。心と筋肉が融合しない。今の武蔵には水紋と白い雲だけしか眼に映らないのだ。

その頃、浪の音、松籟、雑木、篠竹の笹の戦ぎにまじって、全島、息をひそめて、じりじりと時が経つのを待っていた。約定の時刻が一刻以上も過ぎたのに、来ない武蔵に催促の飛脚船を二度まで出したのに、と奉行以下、焦燥と武蔵への反感を露わにして舌打ちさえしたい気持ちで焦れていた。「武蔵来れり」の報が駆けめぐったが、それは「遅参する」という武蔵の伝令船であった。緊張の糸が緩む。あたかもその隙を見すかしたように、小舟が北側の入江を避けて、大きく迂回して近づいてきた。時刻はちょうど規定の刻限より遅れること約一刻、巳之下刻(十一時)を回っていた。真昼の陽は全ての物の影を小さくし、入江の海面は夏の海のようにぎらぎらと反射した。戦ぐ風の音だけが流れ、島は死んだように静まり返った。陽は中天に近かった。

小舟は距離を測るように速度を落とした。南側の入江は波も立たず、浅瀬の砂地が青く透きとおっていた。仙太郎は櫓の早緒(舟底から櫓を結ぶ綱)を弛めながら、目配りをしながら訊いた。磯には人っ子一人見当たらなかった。

「真つ直ぐに舳を向けよ。浅いなあ、遠浅だ。引き潮だから無理に舟を上げるな。——よし、ここだ」

舟底が砂を噛んで、どすんと持ち上がったようにして止まった。武蔵はすでに身支度を終えていた。身軽にすうつと立ち、ふわりと海水の中へ跳びおりていた。引つ提げて

いる櫂の木剣の先を、浪の白い泡が洗つてる。五歩、六歩歩いた。仙太郎は武蔵の姿を呆然として見送つた。

一段と高くなつた老松の根元から、狸々緋を着た赤い炎が燃え走るように、武蔵を目がけて駆け寄つてくる。大きな物干し竿の業物の赤い塗り鞘が、真昼に近い陽に光つていた。水際で踏みとどまつた佐々木小次郎は叫んだ。武蔵は海中に仁王立ち。

「武蔵か」

巖流から機先を制するかの如く誰何し、水際から一步も陸に上げぬ、と大きく立ちはだかつた。

「小次郎……よな」と、武蔵は水の如く言つた。櫂の木剣をゆらりと波が洗つている。

「武蔵……武蔵」と小次郎が連呼した。海峡の引き潮の潮鳴りが遠くから寄せてくる。低音に交じつたひたひたと足もとに寄せる波は小忙しく叩く。

「気怯れか。奇策か。武蔵の常套手段か。これまで使い古した卑怯なふるまいと見たぞ。約束の刻限は疾く過ぎて、もう一刻の余も経つ。巖流は約定を違えず、最前からこれにて待ちかねていた。常に、故意に約束の刻をたがえて敵の虚を突く戦法は汝の手法、今日はその手に乗らない巖流だ。心して掛かつて来い、武蔵」

言い放つや否や巖流は小脇に持つていた大刀物干竿を抜

き放ち、左の手の朱鞘を、波間に放り投げた。武蔵は水のような冷たい声で静かに言つた。

「今日の仕合いは勝負あつたのだ。私の勝ちだ！ 勝つ身なれば大刀の納まるべき鞘を何故捨てる。汝の勝運は尽きたのだ」

「何をたわ言をぬかす」と巖流は武蔵の動きを追いながら、武蔵の足が水際を離れるのを狙つた。

巖流の物干竿の大刀が、風を起こして武蔵の頭上を襲う。武蔵の体へ確かに打ち込んでいた。物干竿が閃光の如く走つた。櫂削りの武蔵の木剣は音もなく、跳んで頂点から武蔵を斬り下げてきた巖流の刀を、頭上でガキツと鏗鳴りをさせたのみである。

九尺の間合いで二人は対峙した。武蔵は水中から二、三步あがつた波打ち際に立つて、海を背に巖流を迎えていた。寄せ返す波音を五たび数えたであろうか。二人のいずれが発したか分からぬほど、生命を賭けた吸う息、吐く息があたりを圧した。物干竿の長刀が円を描いて火を吐くように武蔵の真つ向に跳んできた。

武蔵が左肩を下げ両掌の中の櫂の木剣が風を起こして動いたと見えた時、巖流の長剣が武蔵の眉間を割つたと見えた。二人の姿は一瞬、一体の仏のように合さりながら跳び離れていた。武蔵は海を背にして動かなかつた。真昼の

太陽は波に強く反射し、視覚を狂わせる。

二人の間合いは六尺に縮まっていた。長剣と權の木剣は、両者が青眼に構えれば触れ合う間である。しかし、巖流は燕返し秘剣をふるうために大上段に構えた。武蔵は無造作に間合をつめ、次の瞬間、宙に跳んで權の木剣を払うと見せて真つ向から振り下ろした。大上段に構えた長刀が、唸りを発して、大きく宙を斬り下げた。武蔵の締めた渋染めの鉢巻きがハラリと落ちた。その瞬間、巖流の顔面に權の木剣が発止と打ち込まれていた。

武蔵は仙太郎を呼び、舟にとび乗った。その間、ほんの数秒であつたろう。

武蔵は、巖流は落命していない、と思ひ、舟の中から荒筈を島の小高い丘へ振つた。潮が止まつた。さしもの速い潮流もゆつくりと返しはじめて門司ケ関の方へと動いている。仙太郎は何かに追われるように、門司ケ関の風師の浦へ向けて満身の力を櫓に込めて漕いだ。武蔵は眼を閉じて一言も発しない。風師の浦へ着くやいなや武蔵は、かたじけなく、と言つて門司の城代沼田延元の屋敷の方角へ風の如く消えた。

小次郎敗れたり報せは、船島の目と鼻の間の彦島に集まつていた門弟たちに届いた。彼らは退去して渡海し、船

島に届いた時には武蔵も、武蔵の弟子たちの姿もなかつた。弟子たちが見たものは、無残に顔面をえぐられ、頭を割られ、頭蓋骨が白く飛び出ししている小次郎の遺体であつた。弟子たちは小次郎に助太刀すべく集まつたのだが、小次郎は「高札を見たかッ」と一喝した。小次郎は潔く、一人で決闘に臨んだ。約束を守つたのである。

武蔵の眉間を小次郎は確かに斬つていた。だが、それは武蔵が締めていた渋染めの鉢巻きであつた。毛ほどの時間差で權の木剣が小次郎の顔面をえぐつた。致命傷ではなかつた。確かに小次郎は生きていた。島に隠れていた武蔵の弟子たちに荒筈が振られた頃に息を吹き返した。弟子たちが櫓の木刀で頭を割り、落命させた。武蔵も小次郎の燕返しあの奥義を恐れ、遅参の心理作戦、水際作戦、陽光作戦と全ゆる手段あを使つての、薄氷を踏む思ひの決闘である。一撃で相手を絶命させる確信がなかつたので、弟子たちを潜伏させ絶命をはかつたのである。

兵法者同士の仕合いは、私闘であれば、ただの殺人である。いかに名のある兵法者であろうとも私闘は殺人で裁かれる時代に入つていた。したがつて、その地を治める大名が裁定する。小倉細川藩主、細川忠利公のお声がかかりで行われた。いわば公式戦における勝負検分役を船島に派遣した。

細川藩の藩士巖流佐々木小次郎と作州牢人宮本武蔵の一戦は、世にうたわれたような武蔵の華々しい勝利ではなく、ぱらりずんと斬られたのは武蔵の汚染めの鉢巻きで、小次郎は權の木剣で顔をえぐられ気を失っていた。それを助太刀罷りならぬの達しを無視した武蔵派の行動は、当時のゆるやかな法規制下でも小倉城下の指弾を受けたのである。

門司城代沼田延元の屋敷に逃げ込んだ武蔵は、佐々木小次郎の弟子衆から命をつけ狙われ、世人からは遅れ襲撃の汚い戦法を非難される破目となったが、全国の兵法者の間ではこれを機に宮本武蔵の武名はいよいよあがっていったのである。

沼田延元は、小次郎と武蔵の試合の顛末を『沼田家記』の中にこう記している。

「延元様が門司に（城代として）いた時のことです。宮本武蔵玄信が豊前（小倉藩）に参上して、二刀流剣術の師範をいたしました。その頃小次郎と申す者が岩流の剣術を遣い、彼も師範をしていたのです。双方の弟子たちが師の剣術の優劣を申し立てたので、武蔵と小次郎は剣術の試合をすることにし、豊前と長門の間の彦島にやって参りました。双方、弟子は一人も連れて参らぬことに決め、試合を致しましたところ、小次郎が打ち殺されました。小次郎方は約束通り、弟子は一人も参りませんでした。ところが武蔵の弟

子たちはやって来て隠れておりました。その後、小次郎は息を吹き返しましたが、かの弟子たちが集まって来て（小次郎を）打ち殺してしまいました。このことが小倉に聞こえたので、小次郎の弟子たちは心一つにして武蔵を討ち果たそうと大勢で彦島へやって来ました。このため武蔵は逃れ難く思い、門司へ逃げてきて、ひたすら延元さまにすがったので（延元さまは）お引き受けになって（武蔵を）門司城中に匿ったので武蔵はつつがなく運を開いた（生命の危険を脱した）のでした。その後、武蔵を豊後へ送り遣わされました。石井三之丞と申す馬乗りに鉄砲の者どもを付けて道中を警護いたし、何事もなく豊後へ送り届け、武蔵を無二斎なる者に渡したというところでございます」

武蔵は、小次郎に勝ったとはいえ、約束を破ったのである。高札を無視した武蔵の戦法は、いかに細川忠利が鼻直しでも世評が許さず、忠利は家老たちの反目を治め、かつ武蔵を救うため、豊前小倉から国外退去させ、武蔵の父無二斎が逗留する豊後への移送の裁定を下した。日出藩三万石、木下延俊の元に送ったのである。

命は助かった武蔵であったが、細川家への任官は、水の泡となったのである。

* 参考…『北九州市史』、『宮本武蔵』（吉川英治著、朝日新聞社）